

Title	クラークソン著「前工業化イングランドの経済1500-1750」(五): 第5章商業と交通(1)
Sub Title	L. A. Clarkson, The pre-industrial economy in England, 1500-1750
Author	大貫, 朝義 酒田, 利夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1975
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.68, No.5 (1975. 5) ,p.487(75)- 495(83)
JaLC DOI	10.14991/001.19750501-0075
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19750501-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

クラークソン著「前工業化イングランドの 経済 1500-1750」(五)

第5章 商業と交通(1)

L. A. Clarkson, *The Pre-Industrial Economy in England, 1500-1750*
(B. T. Batsford Ltd., London, 1971, pp. 268)

大 貫 朝 義
酒 田 利 夫

前章までにおいて述べた農業及び工業活動の拡大には、商業制度及び運輸の改善が必要とされ、またそれらの改善〔を行うこと〕によってこの拡大は可能となった。本章では、主としてこれらの改善を取り挙げる。まず商取引の地理的パターンを跡づけ、それから流通手段の発達、商取引に必要とされる金融制度、及び運輸の発達を考察する。

国内取引

産業革命以前のイングランドにおける商業に関する論稿は、どうしても史料が比較的豊富に存在する全国的な——さらには——国際的な取引に焦点を絞って論じたものとなってしまう、〔実際には〕取引の大部分が、せいぜい2-3マイルの商品の移動を含むにすぎない局地的なものであったということが、容易に忘れ去られている。〔しかしながら、〕1841年に至っても、イングランドにおける手工業者の40%以上は〔その製品を〕専ら局地的市場 local markets に向けて供給していたのであり、1750年以前においては、この比率は遙かに高いものであったに相違ない⁽¹⁾のである。少数の企業家的精神の持主 enterprising spirits のみが、ロンドン乃至その他の遠隔の都市によって提供される〔市場〕機会に惹きつけられたのであり、海外市場に惹きつけられる者は更に少数であった。しかしながら、これら少数の者達は、16、17世紀及び18世紀前期を通じて、その数を増していった。

多くの理由が協働して、取引を局地的範囲にとどめ

ていた。しばしば、それは遠隔地市場についての知識の単なる欠如の結果であり、また時には、旅行の危険やその費用、及び何マイルも離れた場所の見知らぬ者と取引することの危険が、取引の拡大を妨げたのである。〔しかし取引の拡大に対する〕最大の制約要因は運輸の未発達であり、当然のことながら、遠隔地取引は水運に恵まれた交易圏において最も隆盛をみた。取引の範囲は、生産物の性格によってもまた左右された。たとえば、穀物や石炭は相対的に価値の低い嵩張る生産物であり、運輸費用が低廉でない限り、これらの生産物を長距離にわたって輸送することは経済的でなかった。他方、羊毛はその嵩の割には価値が高く、16世紀より遙か以前に全国的及び国際的な羊毛取引の発達をみた。また、家畜取引は、穀物乃至酪農製品の取引よりも一般に広範囲にわたって行われた。これは、家畜が市場まで自ら歩くことが可能であり、そのため運輸費用を低廉に済ましうるといふ大きな利点を有していたためである。ミルク乃至卵のような腐り易い産物は、遠隔地で販売されることは殆ど全くなかった。尤も、有塩バターやチーズはヨリ広範囲に販売された。工業製品は、製造の過程でヨリ大きな価値が付加されるため、農産物よりも恐らくヨリ広範囲に取引された。しかし、嵩張るものとなるために、この利点が相殺される場合もあった。

16、17世紀に、運輸及び流通手段が改善されたことによって、国内取引の着実な発展が可能となった。しかしながら、運輸の改善は、取引の拡大の要因であると同時にその結果でもあったのであり、取引の拡大の

注(1) C. Day, 'Distribution of Industrial Occupations in England 1841-1861', *Trans. Connecticut Academy of Arts and Science*, vol. 28, 1926-7, pp. 94-5.

基礎をなす要因は、寧ろ人口及び所得の増加であった。比較的肥沃でない地域では、人口が増加するに伴って、他の地域から食料を搬入することが必要となった。人口は、牧畜農業が支配的な地域において、穀作農業地域よりもしばしばより急速に増加し、このため余剰穀物のある地域から穀物を購入しなければならなかった。牧畜農業地域の人々は、家畜や畜産物を生産するのみならず、亜麻や麻の如き労働集約的な作物を栽培し、さらにはさまざまな種類の工業生産に特化することによって生計を立てたのであるが、これらの産物に対する市場は、イングランドの他の地域乃至海外に存在した。従って〔このことから明らかなように〕、国内取引の発展は、農業及び工業における地域的特化が増大するに伴って、不可避的に生じてきたものであった。

前工業化イングランドにおける人口の増加はまた、国内取引〔の発展〕に対して強力な刺激を与えた都市化をももたらした。既に述べたように、都市居住者の多くは消費者及び食料品と原材料の加工業者であり、この食料品と原材料とは周辺農村から供給されていた。都市は、それ自体、製造業及び加工業の中心地であり、その工業製品が農村に向けて逆流した。大都市はまた海港でもあり、帆布、絹織物、キャラコ、金物、ガラス、食料品雑貨、ぶどう酒、砂糖、タバコの如き輸入商品の流通拠点でもあった。都市の発展は、単により大量の需要を生ぜしめたばかりでなく、他にもさまざまな形で取引の発展に影響を与えた。1640年におけるロンドンの人口が、「ケント及びサフォーク両州の人口を恐らく上回る程の規模であり」、従って「イングランドの農産物のうちロンドン居住者によって消費される割合は、決して全体の一小部分以上のものではありえなかった」と主張することは、大規模な都市市場と分散的な農村市場との間にみられる重要な質的相違を蔽い隠す結果となる。都市市場のより大規模な需要は、高度に発達した市場制度を必要とした。たとえばロンドンには特化市場及び一般市場が存在し、日曜を除いて毎日取引のために開設された。17世紀前期には常設店舗がロンドンの通りの一つの特徴となり、首都ロンドンは、卸売業者と小売業者との複雑なネットワーク

によって供給をうけた。また、取引を容易にすべくロンドンにおいて金融制度がいち早く発展し、長期乃至短期の信用が利用可能であり、もし商人が現金の入手を希望するならば、他のいかなる地域におけるよりもより容易に得ることが可能であった。都市需要の性格もまた、異なるものであった。所得水準は、農村よりも都市においてより高かった。というのは、都市には商人、法律家、官吏及び上位聖職者の如き高所得者グループが居住していたし、土地所有者もロンドン乃至地方の中心都市にしばしば都市邸宅を保持していたからである。都市の賃銀相場もまた、恐らく農村におけるよりも高かった。それ故、都市居住者は、より特殊なものを需要するだけの余裕があり、高価な奢侈品を購入することが可能であった。ロンドンの如き市場のみが、濡れた麦ワラ製の袋 barrels of wet straw に詰められ、馬の背や荷馬車に積まれて、サセックスや湖畔地方から搬出される鮭や鯨の取引の担い手となりえたのである。消費習慣は農村地域よりも都市においてより急速に変化し、新しい取引を刺激した。そしてより多数の顧客が存在したため、需要の価格弾力性は、都市において恐らくより大きかった。従って、農民や製造業者は、その生産物を大規模な都市市場に向けて供給するならば、小市場町乃至村落で販売する場合に較べて、その価格を下げることによって商品の販売量を増大させ〔るという機会により多く恵まれ〕たものと思われる。

国内取引が国境を超えて〔営まれ〕ることはなく、従って、外国貿易の取引量及び取引先を調べようとする場合には大変役に立つ記録を残している。官吏の綿密な注意の埒外に置かれている。それ故、国内取引の主要な流れを把握することは極めて困難である。それにも拘らず、局地的取引の諸様相から〔推定することによって〕、2, 3の主要商品の国内取引の流れ〔の諸様相〕を地図上に描くことは可能である。これらの取引の流れの多くは、ロンドンへと向けられていた。ロンドンを中心とする広範囲の穀物取引は、16, 17世紀に発展した。16世紀後期には、ホーム・カウンティーズ及びイースト・アングリアが、取引される穀物の大部分を

注(2) A. Everitt, 'The Marketing of Agricultural Produce', The Agrarian History of England and Wales, vol. IV, ed. J. Thrisk, 1967, p. 514.

(3) [たとえば、] 1785年にアイルランドの対イングランド交易に対する規制の廃止をめぐる議論が交された時に、次のような指摘がなされている。即ち、アイルランドのなめし皮製造業者は、ロンドンにおいてなめし皮を現金売りすることによって運転資本を獲得することが可能であると思われるが、これはアイルランドの未発達な市場においては不可能なことである、と (Parliamentary Papers, 1785, vol. VIII, p. 113)。

供給していた。そして17世紀前期までには、穀物は、ヨークシャー及び[イングランド]北東部の海岸地方からばかりでなく、テムズ河上流流域及びミドランズ南部の市場町からも供給されていた。1640年以前においては、イングランド東部の約60の市場町が穀物取引に特化しており、これらの市場町は、殆どすべて河川の近くに位置していた。18世紀前期までには、ハンパー河からセヴァーン河上流までを直線で結んだ場合、その南側のイングランド全域が、事実上ロンドンの穀倉であった。

全国的な羊毛取引は、中世後期における羊毛輸出商人の需要を満たし、且つは発展しつつある毛織物業に原毛を供給すべく、穀物取引に先行して発展した。主要な毛織物業地域は、そのすべてが他の地域で生産される羊毛によって地域内の羊毛供給を補っていた。16世紀後期には、イングランド西部の高級毛織物生産地域の織物業者は、ヘレフォードシャー、シュロップシャー、スタフォードシャー及びミドランズから短繊維の羊毛を購入した。この取引の中心はサイアレンセスターであり、そこにはミドランズその他の羊毛販売人や織物生産地域の織元が訪れた。17世紀前期までには、イングランド西部の生産者は、恐らくはミドランズから供給される羊毛の質がますます低下していったために、[原毛供給地として]ウェールズ南部やイングランド南部にも目を向けつつあった。イースト・アングリアの[毛織物]業者は、自分達が使用する羊毛の多くをその地域内で購入していたが、リンカンシャー、ミドランズ及びロンドンからも供給を受けていた。ウェスト・ライディングの粗製毛織物業は、その地方産の羊毛の供給を受けていたが、羊毛は、スコットランド、リンカンシャー、レスターシャー及びノーサンプトンシャーからも購入されていた。18世紀の前期までには、ヨークシャーの[毛織物]業者は、ロンドンからもまた供給を受けていた。ロンドンの羊毛販売人は、ホーム・カウンティーズ産の羊毛、食用に屠殺された羊の死骸から剥いた羊毛皮及びアイルランドから輸入される織糸を販売した。しかしながら、17世紀後期における最大の羊毛「産出地」'magazine'は、16世紀に穀作農業から牧畜農業に転換したミドランズ東部であった。レスターシャー及びノーサンプトンシャーの如き諸州は、自州内に毛織物業を殆ど有していなかったため、事実上イングランドのすべての毛織物業地域に原毛を供給した。

ロンドン⁽⁴⁾は、「なめし皮商人の大集会所」であった。首都はなめし皮及び皮革製品の大消費者であると同時に、獣皮の大生産者でもあったため、2つの方向に向って取引が行われた。即ち、獣皮がタン皮の得られる地方へと売却される一方、なめし皮は[ロンドンの]消費者[加工業者]の手に流れ込んだのである。16世紀前期ハーフォードシャーの皮なめし工は、ロンドンの肉屋と獣皮購入の定期契約を結んでいた。一世紀後には、取引圏が非常に拡大していたので、地方の皮なめし工はロンドン市当局に対して次のような要求を行った。即ち、彼らが安息日に[取引のために]旅して不滅の魂を危険に晒すということがなくて済むように、ロンドンホールでのなめし皮及び獣皮市場の開催日を[従来の]月曜日から火曜乃至水曜日に変更してほしいというのである。1680年代までには、ホーム・カウンティーズ及びミドランズ南部全域のなめし皮製造業者が、獣皮を購入したなめし皮を販売するために、定期的に陸路ロンドンへと赴いた。17世紀には、ヨークシャー南部の皮なめし工は、獣皮を購入するために殆ど毎年ロンドンに足を運んだ。そして彼らは購入した獣皮をハルに船積輸送し、それから、「ハンパー河をターンブリッジ Turnbridge やボウトリー Bawtry までさかのぼり、そこからヨークシャーのウェスト・ライディングのわれわれの幾つかの居住地まで陸路運搬した⁽⁵⁾」。殆ど定期的に、原料の獣皮が[ロンドンから]ファヴァーシャム Faversham やケント北部の他の諸港に向けて送られたが、それは、カンタベリー周辺の森林からタン皮を得ていた、地方の皮なめし工の使用に供するためであった。その見返りとして、仕上げられた皮革がロンドンへと送り返された。さらに遠隔のイングランド西部において、大量の軽皮革及び手袋がロンドン市場向けに生産された。

石炭に目を転ずると、イングランドの石炭総生産量の約半分が、沿岸及び河川の船運によって市場に送られた。18世紀前半においては、ロンドンのみで石炭産出量の6分の1を消費したが、西はオクスフォードシャーから東はエセックス及びケントに至るまでの諸州は、ダイン河岸から船積輸送された石炭の供給を受けていたのである。一部の石炭は陸路運搬・取引され、特にレスターシャー、ノーサンプトンシャー、ウースターシャー、さらに南はオクスフォードシャーに至るまでの市場への供給路となっていたフォス道路 the Fosse Way の近隣

注(4) Minute Book of the Company of Curriers, 1628-56 (Gild Hall Ms. 611 2/1), p. 77.

(5) P. R. O. S. P. 16/65, no. 45.

に位置した、ウォリックシャ炭田に産する石炭の場合には、そうであった。

ロンドンを中心として、バター、チーズ及び肉の全国的取引が行われていた。エセックス及びサフォークが、チーズとバターを〔ロンドンに向けて〕持続的に供給していたが、さらに遠隔の地から付加的な供給が行われる場合もあった。家畜は歩き牽かれて肉屋のもとへ引き渡されたため、肉〔畜〕の取引は広範囲にわたっていた。この時期を通じて、十分に確立したひとつの取引のパターンがみられた。屠せた家畜が、イングランド北部、西部及びウェールズの牧畜地域の飼育業者からミドランズ及びホーム・カウンティーズの牧畜業者に売却され、彼らはその家畜を市場向けに肥育した。ミドランズ南部、リンカンシャ、イースト・アングリア、さらにはウィルトシャの農民は、ロンドン市場向けに家禽、豚及び兎を飼育することが〔十分〕ひきあうものであるということを知っていた。

確かにロndonは最も重要〔な取引中心地〕であったのではあるが、ロンドンを前工業化イングランドにおける国内取引の唯一の中心地と看做すならば、それは誤りである。17世紀及び18世紀前期を通じて、ブリストル、リヴァプール、マンチェスター、バーミンガムの如き海港及び工業中心地は、国内取引〔の発展〕を刺激したのであり、生産者に新しい機会を提供すると同時に消費者の選択の範囲を拡大するという点において、小ロンドンとしての機能を果たしたのである。農村において発展しつつあるすべての市場町は、〔当時〕拡大しつつあった商業圏の中心に位置していた。しかしながら、1750年という時点においてさえも、イングランドが真の全国市場を形成していたと考えるならば、それもまた誤りである。無知、保守主義及び交通の未発達、イングランドを未だに多数のただ莫然と統合された地域経済〔圏〕に細分化していた。全国経済の発展という方向に向かって、既に幾分かの進歩がなされていた。しかしながら、たとえばケント乃至エセックスの生産者にとっては、カンバーランド乃至はコーンウォールの消費者に対して供給することは、フランス或いはフランダースの消費者〔に向けて供給する〕場合に比べてより困難なことだったのである。そして、近隣の町や村に見出される顧客と比較すれば、〔他の〕すべて〔の顧客〕は遠い存在であった。

外国貿易

「全キリスト教世界乃至この世における如何なる王国をも遙かに凌ぐ〔ほどの〕本国産の取引商品の豊富さと量⁽⁶⁾」にも拘らず、イギリス経済は自給自足的なものではなかった。地中海沿岸諸国からは、羊毛、ぶどう酒、植物油、獣皮、染料、スマック、明礬及び塩が供給された。バルト海沿岸諸国からは、魚類、毛皮、木材、鉄及び穀物が供給された。一方、非ヨーロッパ圏〔の諸国〕からは、薬種、食料品雑貨、絹織物、綿織物、貴金属及び宝石類が供給された。イングランド自体は、西ヨーロッパの比較的工業化した地域の一部としての位置を占めていたのであり、事実その外国貿易の殆どは西ヨーロッパ諸国との間に行われた。

前工業化イングランドは、外国市場に需要のあった一商品、即ち紡毛織物を、他の何物にもまして生産した。このイングランド産の毛織物の殆どは、自国内に重要な毛織物業地域を有した毛織物を〔外国に〕輸出していた西ヨーロッパ諸国に売却されたのであり、毛織物の国際的な取引は、それぞれの国が他の国と比較して〔原料上の、また技術上の〕利点を有することにより、イングランドの生産者はある特定種類の毛織物生産に、〔他の〕ヨーロッパ〔諸国〕の生産者は他のさまざまな種類の毛織物生産に、それぞれ特化していくという、微妙な均衡の上に成り立っていたのである。毛織物の国際市場は極めて激しい競争下におかれていたのであり、16、17世紀におけるイングランドの〔毛織物〕輸出貿易の歴史は、確定した市場のなかにあつて〔毛織物〕生産者がいかほどの期間たりとも輸出〔量〕を増大し得なかったという事情によって特徴づけられる。生産費を切り下げること——従つてまた〔それによつて〕販売量を増加させること——を意図した技術革新は著しく欠如しており、それ故に毛織物生産・取引の発展は、生産費削減及び販売量の増加という形をとる代りに、製品及び市場の多様化という形をとることになった。

14世紀中葉までは、イングランドの主要な輸出商品は原毛であったが、1350年以降、多くはフランダースの生産者の犠牲において紡毛織物の輸出貿易が発展した。15世紀を通じて、羊毛と毛織物の輸出貿易は並行して行われていたが、いずれもさしたる拡大の兆候を示さなかった。〔毛織物輸出貿易の〕拡大の機会は、

注(6) Sir John Watts, A Discourse upon Trade (1625?), quoted by R. H. Tawney in Business and Politics under James I, 1958, p. 33.

ヨーロッパにおける人口増加の停滞及び毛織物に対する需要の所得弾力性の低さによって制限されていた。しかしながら、15世紀末には毛織物の輸出が幾分増加し、この増勢は断続的にはあるが1550年頃まで続いた。〔結局、〕イングランドの毛織物総輸出量は、16世紀前半に3分の1ほど増加したものである。実際、ロンドンからの毛織物の年間輸出〔量〕は、標準毛織物 short-cloths で5万反から11万反以上へと増加したのであるが、この増加は、地方諸港からの紡毛織物輸出の減少と梳毛織物輸出の減少とによって相殺されてしまったのである。

毛織物輸出を拡大させた主要な要因は、恐らくイングランドの工〔毛織物〕業の供給条件にあった。イングランドの放牧地は良質の短繊維の梳毛を豊富に産出し、この梳毛はイングランドの毛織物業者はもちろん、ヨーロッパにおいても多量に需要された。しかしながら、原毛には輸出の際に重関税が課せられ、その額は1500年には原毛の価格のほぼ3分の1に相当した。かくして、イングランドの織元は、特に毛織物の輸出関税が〔原毛の輸出関税とは対照的に〕極めて低いものであったという事情もあったために、相当の利益を享受した。イングランドの毛織物業者は農村の労働者をヨリ多く雇傭したのであるから、イングランドにおいては労働費用もまた大陸に較べてヨリ低額であったものと思われる。他方、毛織物の染色及び仕上げのための原材料・用具は、その多くが輸入されたものであったため、一般にヨーロッパにおけるよりもイングランドにおいてヨリ高価であった。イングランドにおいては技術水準も恐らくヨリ低位であり、毛織物の4分の3乃至それ以上が未染色且つ未仕上げのまま輸出されていた。需要面についてみるならば、人口の増加によってヨーロッパ市場が拡大された。政治的状況は比較的安定しており、アントワープには効率的な商業施設が存在していた。1540年代には、ヨーロッパにおける豊作及び大量の軍事的需要〔の創出〕によって、〔毛織物輸出〕貿易〔の発展〕は一層助長された。そして、1540年代の最後の2年間においては、イングランドの通貨の改〔悪〕鑄がヨーロッパの通貨に換算した場合の毛織物価格を引き下げ、恐らくは毛織物輸出を刺激した。

1500年から1550年に至るまでの間の〔毛織物輸出の〕発展は緩慢なものではあったが、この増勢さえも16世紀の後半までは持続しなかった。1550年代及び1560年代は、通貨上の混乱、疫病、不作及び結果的にイングラ

ンド商人に対するアントワープの閉鎖にまで立ち至ったヨーロッパにおける政治的混乱の結果として、輸出量が非常に変動し、毛織物貿易の極めて不安定な時期であった。1670年代までに、毛織物輸出の水準は、1550年代初めに達成された水準の約20%減少したところで落ち着いた。安価な羊毛と安価な労働力が16世紀初期にイングランドの毛織物業者に対して与えていた如何なる鋭い競争力も、今や鈍化させられてしまった。実際、羊毛に関する限り、16世紀末までにはイングランド産羊毛の質が徐々に粗質なものになっていたため、イングランドの織元は良質の羊毛の供給地として南ヨーロッパに目を向けつつあった。17世紀前期には、西ヨーロッパにおける平和の回復に伴い、毛織物貿易が幾分拡大した。しかしながら、イングランド〔産毛織物〕の最も重要な顧客であった低地地方及びドイツは、基本的には発展する〔見込のある〕市場ではなかった。輸出貿易の大部分を占めていた白地毛織物にかえて染色毛織物を輸出しようとする、ウィリアム・コケイン William Cockayne の試みが不成功に終わったため、〔毛織物〕輸出は1614年から1617年の間に大きな打撃を受けた。この計画が失敗したのは、大陸の毛織物業者が毛織物の仕上げにおいて優位に立っていたためである。それから数年後の1620年から1624年の間には、ヨーロッパにおける通貨の価値が下落して、地方的な通貨に換算した場合のイギリス産毛織物の価格を上昇せしめ、その競争力を喪失させたため、毛織物貿易は再び妨げられた。これら2つの出来事は、〔当時の〕毛織物に対する需要が非弾力的なものであるという事実を明瞭に示した。1620年代の後半には毛織物輸出が幾分回復したが、一般的に1630年代及び1640年代は停滞の時期であった。

以上において概観された諸々の困難が影響を及ぼしたのは、旧毛織物——短繊維の梳毛で織られた重い縮絨された毛織物——の貿易に対してであった。16世紀後期及び17世紀前期には、この旧毛織物の輸出が衰退する一方、ヨリ安価で軽い新種毛織物の輸出が急速に増加した。既に前章においてみたように、イングランドにおける新種毛織物業は、フラジダースの織布工の流入及びイングランドで入手しうるようになりつつあった長繊維の羊毛の供給増加によって、〔その発達を〕刺激された。1601年にロンドンから輸出された新種毛織物の額は、恐らく旧毛織物の輸出額の約20%であったが、1640年までには、両貿易部門の輸出額はほぼ等しいものとなった。ロンドンから輸出される旧毛織物

及び新種毛織物の総貿易額は、17世紀の最初の40年間に約75%増加した。薄手の毛織物は、温暖な南ヨーロッパ及び北アフリカのあまり競争の激しくない市場で多く販売され、1640年には、ロンドンからの新種毛織物輸出の約65%がこれら2つの市場に向けられていた。

17世紀後半には、毛織物の輸出量も輸出額も共に増加し続けたが、オランダ、スペイン及びフランスとの戦争によって〔この増勢が〕しばしば妨げられた。現在利用しうる統計数字をもってしては、この増加の程度を確実に算定することは不可能であるが、遙かに重要なことは、旧毛織物に代って新種毛織物、混織及び染色織物が優位となるに従い、毛織物〔輸出〕貿易がますます多様なものとなっていったことである。市場もまた変化し続け、南ヨーロッパ市場が西ヨーロッパの市場よりも急速に成長した。1700年までに、地中海沿岸諸国は、〔イングランドの〕ヨーロッパ向け毛織物輸出総額の40%を輸入するようになっていた。18世紀においても、事態は殆ど同様であった。即ち、1700年から1750年の間に西ヨーロッパ及び北ヨーロッパ向けの毛織物輸出額が実際に減少したのに対し、南ヨーロッパ向けの輸出は60%以上増加したのである。

第3表 イングランドの輸出貿易の構成(%)

	1640年	1700年	1750年
毛織物製品	80-90	48	33
他の工業製品	—	8	20
食料品	—	8	12
原材料	—	6	5
再輸出品	3-4	31	29

1640年以降、総輸出額に占める毛織物の比率がますます小さなものとなっていったのは、主として西ヨーロッパの毛織物市場の慢性的停滞のためであった。第3表は、この状況を要約的に示している。毛織物は依然として最大の単一輸出品目であったが、その増加率は、再輸出品及びさまざまな工業製品の増加〔率〕よりも遙かに低かった。再輸出品は、アメリカや西インド諸島の植民地及び東インド会社の支配圏からもたらされるものであり、主としてタバコ、砂糖及びキャラコであった。その販売量は、価格が下落し流行が変化するに伴い、イングランド及びヨーロッパにおいて急速に増大した。イングランドの商業政策は、これらの商品がイングランドの諸港を経由して交易されることを確実にものとしており、またこれらの諸商品がその産出諸国にもたらした収入は、産出諸国が金物、衣類、

皮革〔製品〕及び毛織物の如きイングランドの工業製品を輸入することを可能とした。1750年までには、さまざまな工業製品の73%及び毛織物の17%が、ヨーロッパ大陸以外の市場に輸出されていた。

輸出貿易においてその他の商品が重要な位置を占めることは、殆どなかった。原毛の輸出は1520年以降衰退し、1600年までには事実上消滅してしまった。穀物輸出も、大規模なものとならぬまま、同様に1600年までには消滅した。いずれの場合においても、国内需要の増大が、輸出に向けうる如何なる余剰の成立をも阻止したのである。しかしながら、農業生産性の上昇が、輸出商人への奨励金支払い政策と相俟って、イングランド商人がバルト海の穀物貿易の崩壊という事情につけ込むことを可能とした18世紀前期の暫くの間、穀物は〔輸出品として〕重要なものとなった。穀物以外では、少量ではあるが持続的に、南ヨーロッパに向けて魚類が輸出されていた。錫及び鉛は、16世紀から18世紀に至るまでの間、常に輸出の5~6%を占めていた。石炭輸出は1700年以降増加し、1750年までには総輸出額のほぼ1.5%に達した。

第4表 イングランドの輸入貿易の構成(%)

	1600年頃	1660年代 (ロンドンのみ)	1700年	1750年
工業製品	40	37	32	22
飲食物、 タバコ	} 60	27	34	41
原材料・ 半加工品		36	35	36

輸入に目を転ずると、その状態は第4表に要約的に示されている。工業製品の輸入は、この時期を通して相対的に重要性を失っていった。16世紀後期には、イングランドは、織物——主にリンネル、混織及び絹織物——及びその他の商品を輸入していた。17世紀末に至っても、主たる輸入工業製品は依然としてリンネル、絹織物及びキャラコの如き織物であり、その多くが再輸出されていた。16世紀における最も重要な輸入食料品は、ぶどう酒、果物、ホップ及び香料であった。17世紀には、砂糖及びタバコの輸入が、18世紀には、紅茶、コーヒー及び米の輸入が、それぞれ急速に増大した。17世紀後期及び18世紀前期において輸入食料品が重要な位置を占めたのは、主としてその大部分が再輸出されたこれらの植民地産の食料品のためであった。第三の輸入品目として挙げた原材料は、この期間を通じて総輸入額の3分の1を少し上回る部分を占めてい

た。その大部分は、染料及び仕上用具と、羊毛、亜麻、麻及び——増大しつつある——絹及び綿などの織糸とによって占められていた。その他の品目としては、獣皮及び毛皮、木材、鉄及び鋼鉄などがあり、18世紀に入って国内生産が需要を下回るようになる；これらの原材料の輸入がその重要性を増していった。

要するに、イングランドの外国貿易の構成は、16世紀から18世紀の間に非常にゆっくりと変化し、その最も重要な変化は、1660年以降再輸出貿易が発展するに伴って生じたのである。再輸出貿易の発展の著しさを奪われると、国内生産物の輸出貿易の構成の変化が如何に緩慢なものであったかということを見失ってしまう。たとえば毛織物は、1650年には〔国産品輸出貿易の〕80～90%を占めたが、1700年においてもなおイングランド産輸出商品（即ち、再輸出商品は除く）の約70%を占めていたのである。同様に、輸入貿易の顕著な特徴もまた、その〔構成の〕変化の少なさにあった。（勿論）ここでも、再輸出を目的とする商品の輸入の増加を除外すればの話である。

同様の特徴は、貿易の方向〔取引先〕においてもまたみられる。1700年に至るまで、ヨーロッパがイングランドの輸出品の85%を輸入していた。ヨーロッパは、最大の競争相手でもあった反面、最も近隣の、最も富裕かつ人口稠密な市場でもあった。イングランドの商人がその注意をスペイン、ポルトガル及び地中海沿岸諸国のヨリ競争の少ない市場に向けるに従い、相対的にその重要性を失っていったのではあるが、ヨーロッパの中でも低地地方、ドイツ、フランス及びバルト海沿岸諸国が最も重要な市場であった。ヨーロッパを全体として見ると、ヨーロッパの製造業者の競争やイングランドの商品に課された関税〔の存在〕にも拘らず、以下の4つの理由により、ヨーロッパは17、18世紀を通じてイングランドの商人にとって依然として重要であった。第一の理由は、再輸出貿易の発展であり、その大部分はヨーロッパに向けて行われた。第二に、イングランドからの穀物及び魚類の輸出の殆どすべてはヨーロッパ向けであった。第三に、スペイン及びポルトガルは、国内消費のためのみならず南アメリカ植民地への再輸出のためにも、イングランドの工業製品を輸入した。最後に、商業政策の結果として、18世紀前期にはアイルランドとの貿易が目覚しく発展した。それにも拘らず、アジア、アフリカ及びアメリカ市場は、イングランド及びヨーロッパへの商品輸出による収入が増加するに伴い、1700年以降ヨーロッパ市場よりも

ヨリ急速に発展した。そして、1750年までには、非ヨーロッパ圏がイングランドの輸出品の約20%を吸収するに至った。

輸入商品もまた、主にヨーロッパからもたらされた。しかし、輸入貿易網は輸出貿易網よりも少しく広範であり、1700年までに32%が非ヨーロッパ圏諸国から輸入されていた。1750年までに、この比率は45%に上昇した。尤も、ヨーロッパへの再輸出のためにイングランドに輸入される植民地産の食料品雑貨及び東インド産の織物や香料がなかったならば、この数字はヨリ小さかったものと思われる。17世紀後期及び18世紀前期において、イングランドの工業が発達し、また輸入関税が高められるに伴い、ヨーロッパからの工業製品の輸入は相対的にその重要性を失った。

外国貿易と国内経済

17世紀末において、ほぼ、5,000万ポンドと推定される国民総生産に対して、輸出されたイングランド商品の額は約440万ポンドであった。資料に現われない輸出を考慮に入れると、イングランドの輸出額は、国民総生産の約10%に相当した。工業製品はヨリ大きな割合が輸出されたが、生産額の3分の1を輸出したのは毛織物業のみであった。18世紀初頭には、恐らく産鉄量の約8%がさまざまな形で輸出され、またなめし皮生産量の約10%が輸出された。1700年における穀物輸出は、恐らく総生産高の1～2%であったが、1750年までには7%に増大した。イングランドの農民及び製造業者の大部分は、外国市場乃至植民地市場には殆ど利害を有していなかった。しかし、外国貿易をこのような狭い視野で考察すると、どうしてもイングランドの経済生活において外国貿易が果たした役割を控え目に述べることになる。なるほど外国からの需要そのものは少額であったが、それは市場を拡大し、従ってまた生産の発展を促進して、究極的には生産組織の改良と新たな生産技術〔の発明・採用〕へと導いたのである。たとえば、毛織物業が問屋制度の採用によって安価な農村労働の利益をいち早く占取し、18世紀には最も早く新発明を進展させた部門のひとつであったことは、決して偶然ではなかった。外国市場は量的には小規模であったが、質的には生産及び流通の組織にかなりの影響を与えたのである。

当時の人々は、外国貿易の状態が国内経済の健全さに影響を与えるなどという錯覚に捉われてはいなかつ

た。16世紀前半に輸出向毛織物生産が発展するに従い、人々は——彼らはそう考えたのだが——外国市場に依存するようになることが賢明であるという見解に疑問を抱き始めた。そして、1550年代における外国貿易の崩壊がこれらの疑問を頂点に達せしめた。1564年にウィリアム・セシル William Cecil は、「我が国における毛織物業の縮小が自国にとり利益である……」理由について、後悔に満ちた考察を行っている。

第一に、我が王国の耕地が〔そのために〕すっかり荒廃させられているからであり、……第二に、毛織物業に依存している人々は、農民に較べて穏やかに統治することが困難な状況にあるからであり、第三に、非常に多数の人々を毛織物業に転職させることにより、王国は、すべての自治都市コーポレート・タウンズに居住するのが常であった手工業者のみならず、あらゆる通常の作業のための労働者にも不足することになった〔からである〕。

これらの懸念はあきらかに誇張されていた。耕地は、王国中の至る所で「すっかり荒廃していた」わけではなく、毛織物業地域においてさえそうではなかった。反対に、1500年から1550年の間における毛織物貿易の発展は、人口が増大しつつあり、農業が快適な生活の望みを殆ど与えることのなかった時代に、毛織物業地域に新たな収入をもたらしたのである。しかしながら、問屋制度の基盤の下に雇傭されていた労働者は、注文がなくなるに従ってすみやかに解雇されたのであるから、輸出の不振が失業を生み出したことは事実であった。

セシルによって表明された如き外国貿易に対する不信は、16世紀においてはありふれたものであったが、それは長続きしなかった。1620年代に毛織物貿易が再びひどい不振に陥った時、それに対する反応は異なったものであった。1623年にエドワード・ミスルデン Edward Misselden は、「毛織物貿易は……国家の枢軸であり、それを軸として他のすべての貿易が……行われ、それなりの循環運動を行うように思われる」と書き、政府は貿易を復活させるためのいくつかの方法を探究した。ミスルデンは、セシルに劣らず毛織物貿易の重要性を誇張した——即ち、その乗数効果を考慮に入れなくとも、毛織物輸出は全経済の活動水準を決定したのである、と。しかしながら、とりわけ1660年以降には、植民地貿易、東インド貿易及び再輸出貿易の

発展に伴い、海外取引の発展がますます〔経済発展の〕ダイナミックな原動力と看做されたことは疑いない。海外取引は、ドック、港及び海運業への投資と複雑な金融及び商業サービスの発展とを刺激した。たとえば、アメリカ貿易、西インド諸島貿易及び東インド貿易に使用される海運の量は、1660年代から1680年代にかけて殆ど2倍となった。17世紀後期には、経済著作家も政策立案者も同様に、外国貿易が経済成長への唯一の確実なルートであると考えていた。

外国貿易は、さまざまな形でイングランドの経済発展に寄与した輸入品をもたらした。輸入原材料は、織物業のさまざまな部門、特にリンネル、帆布、絹織物及び高級毛織物の生産の発展を助長した。少なくとも部分的に輸入原材料に依存している他の工業としては、造船業、金属精錬業及び軽皮革製造業、染色業及び織物仕上げ業などが存在した。タバコ、砂糖及び食料品雑貨の輸入貿易は、タバコ加工業、精糖業、糖菓製造業及びガラス工業を含む一連の関連工業〔の発達〕を刺激した。工業製品の輸入も、たとえ間接的にではあるにせよ、消費習慣を変化させ、また輸入代替工業の創設により国内でも生産される商品への需要が存在することを明らかにするうえで、重要な影響を及ぼした。

しかしながら、16、17世紀の多くの観察者にとって、輸入貿易は単にイングランドの金及び銀の供給に対する脅威としてしか映らなかった。16、17世紀には、貿易収支が輸入超過になっているという意見が流布しており、1690年代における関税管理の改革以前においては、輸入が輸出を凌いだのか或いはその逆であったのかを知る確実な手段が欠如していたため、そのような意見はヨリ一層永続的なものとなった。輸出が不振に陥った1563～1564年に枢密院によって行われた調査は、商品貿易が少額の赤字となっていることを明らかにした。貿易差額が毛織物貿易の健全さに依存しているということは明白であったが、それでも、毛織物輸出がヨリ多かった時には貿易収支が黒字であったであろうということを、誰も確信しえなかった。いくつかの貿易部門は常に赤字であった。16世紀及び17世紀前期において、フランスからの帆布、リンネル及びぶどう酒の輸入額は、イングランドのフランス向け輸出額を上回っていたが、この赤字は、スペイン及び低地地方との貿易で得た黒字によって補填されていた。船舶用品、原材料及び穀物をもたらしたバルト海沿

注(7) Tudor Economic Documents, ed. R. H. Tawney and E. Power, 1924, II, p. 45.

(8) Quoted by B. E. Supple, Commercial Crisis and Change in England, 1600-1642, 1959, p. 6.

岸諸国との貿易は赤字貿易であったが、戦略的価値が存したため許容されていた。イングランドに輸入される東インド産の商品の額は、常に東インドへの輸出額を上回っていたが、これらの輸入商品の多くは、ヨーロッパに再輸出されて正貨をもたらした。実際、17世紀末までには、主として再輸出貿易による利益のため、貿易差額は良好となっていた。

貿易収支への関心は、今日においても広くみられることである。16、17世紀にこの貿易収支に対する関心が生じてきたのは、生活水準を維持するために必要な輸入品への支払いのためというよりも、輸出超過こそ、イングランドが貨幣供給の基盤であった金及び銀の供給を獲得し得る唯一の手段であったためであった。17世紀末以前には、イングランドにおいては紙幣は殆ど流通しておらず、取引行為は金貨乃至銀貨の供給に依存していた。貿易収支が赤字の時には正貨が流出し、鑄貨の不足と取引の縮少を惹き起こした。鑄貨は交換手段として必要とされたばかりでなく、生産者が原材料を購入し、彼らの被傭者に賃銀を支払ううえでも現金が必要とされた。2、3の事業を除けば、固定資本は重要ではなく、また信用機関が未発達であったため、流動資本——即ち、現金——の供給は極めて重要であり、それ故、貿易差額の良好さはこの上なく重要なものとされたのである。

当時の人々の目に外国貿易が重要なものと映った更

に別の理由は、それが政府の一大収入源であることであつた。所得税の発達以前においては、関税は最も重要且つ便利な課税形態であつた。関税は不動産税よりも徴収が容易であり、更に殆ど土地所有者から構成されていた政府にとっては、それが究極的には消費者によって支払われるという付加的な利益を有していた。外国貿易商人は、イングランドで最も富裕な人々に属しており、その富が不動産に固定化されていた土地所有者に較べて、流動資金の入手が容易であつた。それ故、商人は、収入が経常的に支出を下回っていた国王に対する便利な貸付金提供者であつた。16世紀前期においては、国王は外国商人からの借入れを余儀なくされていたが、イングランド商人の富が増加するに従い、徐々に彼らに依存するようになった。商人団体の富は個別商人の富よりも大きかったので、国王は、マーチャント・アドヴェンチャラズ組合、乃至は商人団体から現金を調達したロンドン市の如き、商人のグループから借入れを行うことを好んだ。17世紀末までには、政府信用が再編成され、外国貿易商人の財力に直接依存することは少なくなった。それにも拘らず、商業的富は、政府への貸付けの役割を受け継いだイングランド銀行の設立の如き計画には、深く組み込まれた。

大貫 朝 義 (経済学部助手)

酒 田 利 夫 (大阪学院大学商学部専任講師)

注(9) 国家財政の議論については、後出 第6章 政府と経済、第5節 国家財政を参照。